

シラバスを参照したい科目をクリックしてください。

[戻る](#)

タイトル	開講所属	時間割コード	授業科目名			主担当 教員	対象年次	学期	曜日・ 校時	開講期間
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション 実践学	20130587032101	•コミュニ ケーション実 践学II(社 会・メディ ア・政治)	和	E	深尾 典 男	1年,2年,3年,4年	後期	木 4	~
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション 実践学	20130587032501	•コミュニ ケーション実 践学II(対人 世界の心理 学)	和	E	山地 弘 起	1年,2年,3年,4年	前期	金 3	~
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション 実践学	20130587032502	•コミュニ ケーション実 践学II(対人 世界の心理 学)	和	E	山地 弘 起	1年,2年,3年,4年	前期	木 5	~
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション 実践学	20130587032901	•コミュニ ケーション実 践学II(身 体・かわり ・言葉)	和	E	山地 弘 起	1年,2年,3年,4年	前期	木 3	~
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション 実践学	20130587032902	•コミュニ ケーション実 践学II(身 体・かわり ・言葉)	和	E	山地 弘 起	1年,2年,3年,4年	前期	木 4	~
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション 実践学	20130587033301	•コミュニ ケーション実 践学II(芸 術・スポーツ とコミュニ ケーション)	和	E	西田 治	1年,2年,3年,4年	前期	金 4	~
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション	20130587033302	•コミュニ ケーション実 践学II(芸 術・スポーツ とコミュニ	和	E	西田 治	1年,2年,3年,4年	前期	金 5	~

	実践学		ケース)							
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション 実践学	20130587033701	●コミュニ ケーション実 践学II(日本 語と表現)	和	E	鈴木 慶 子	1年,2年,3年,4年	後期	木3	~
2013年度 シラバス (教養教育 科目)	教養教育-教 養教育全学 モジュール II科目-09 コミュニ ケーション 実践学	20130587034101	●コミュニ ケーション実 践学II(異文 化コミュニ ケーション)	和	E	大橋 絵 理	1年,2年,3年,4年	後期	木5	~



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	後期	曜日・校時	木4
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587032101	科目番号	05870321
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(社会・メディア・政治)		
編集担当教員	深尾 典男		
授業担当教員名(科目責任者)	深尾 典男		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	深尾 典男		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養G棟]G-38		
対象学生（クラス等）			
担当教員Eメールアドレス	fukao@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	広報戦略本部		
担当教員TEL	095-819-2008		
担当教員オフィスアワー	メールで相談のこと		
授業のねらい	<p>社会人に求められる素養の一つに情報を収集し、分析する力があります。みなさんは日常生活のなかで、新聞やテレビ、雑誌、インターネットなどのメディアを通じてさまざまな情報に接していますが、このなかから、自分にとって必要な情報を収集し分析することは社会参画への重要な第一歩となります。一方、日々接する情報のなかには、気づかないうちに、みなさんの意識に大きな変化をもたらしているものもあります。個々のメディアの長所や短所を理解し、自らの社会生活に生かすことが、みなさんにとって重要です。そこで本科目では、近年、注目されたテーマを題材に、各メディアがどのような特性を持つかを分析し、具体的なメディアの活用方法について議論、検討します。また、メディアの表現手法を学ぶことで、自身の表現能力、コミュニケーション能力を高めることを目標とします。</p>		
授業方法（学習指導法）	<p>メディアの最前線で活動するゲストスピーカーを招聘し、メディアの実践的な手法について理解を深めます。同時に、社会的に注目されたテーマを題材に、グループワークやグループプレゼンテーションを実施します。学習者同士で討議することにより、メディアに対する接し方を深めることができると同時に、流通する情報に対して多面的な見方ができる力を涵養します。プレゼンテーションの実施と受講後のレポートを求めます。期末試験は実施しません。</p>		
授業到達目標	<p>(カッコ内は対応する全学モジュール目標の番号)</p> <p>社会の動きに関心を持ち、自ら情報を獲得する生活態度を身につける (①、②、④、⑦、⑧、⑨)          報道される情報を的確に理解し、バランスよく判断できる (①、②、⑦、⑩)          自ら集めた情報をもとに考えをまとめ、他者と議論することができる (①、②、③、⑤、⑩、⑪、⑫、⑬)          メディアの表現方法を学び、自らの表現に生かすことができる (①、③、⑤、⑫、⑬)</p>		
	回	内容	
	1	導入（授業での学習方法の説明）	
	2	メディアの歴史と現状	
	3	メディアを取り巻く環境	
	4	メディアの手法	

授業内容	5	メディアを深く知る（放送）
	6	グループワーク／TV報道について
	7	メディアを深く知る（新聞）
	8	グループワーク／新聞報道について
	9	メディアの果たした役割
	10	メディアが抱えるリスク
	11	変質するメディア
	12	メディアとの接し方
	13	グループワーク／メディアとどう関わる
	14	プレゼンテーション／メディアとどう関わる
	15	プレゼンテーション／メディアとどう関わる
	16	まとめと振り返り
	キーワード	表現手法、権力、ジャーナリズム、ポストモダニズム、ネット活用、メディアリテラシー
教科書・教材・参考書		
成績評価の方法・基準等	出席状況、授業外課題とグループ・プレゼンテーション、レポート提出（2000字程度）を総合的に判断します。	
受講要件（履修条件）	全回出席ができること。与えられた課題に対して事前事後の学習時間を確保できること。	
本科目の位置づけ	全学モジュール科目「コミュニケーション実践学」の選択科目（モジュールII）である。	
学習・教育目標	関心をもったコミュニケーション領域の知識と技能を活用できる。	
備考（URL）		
備考（準備学習等）		



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	前期	曜日・校時	金3
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587032501	科目番号	05870325
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(対人世界の心理学)		
編集担当教員	山地 弘起		
授業担当教員名(科目責任者)	山地 弘起		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	山地 弘起		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養G棟]G-38		
対象学生（クラス等）			
担当教員Eメールアドレス	hyamaji@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	教育学部新館4階		
担当教員TEL	内線2087		
担当教員オフィスアワー	メールで相談のこと		
授業のねらい	<p>皆さんは、例外なく、他の人間たちのなかで生まれ、育ち、今に至っている筈です。周りを見渡せば、親密な関係（家族など）もあれば、生活の一部での関係（クラスメイトなど）やごくわずかな一方的な関係（テレビを通してなど）もあるでしょう。上下関係や年齢に応じた立場や役割に気づくこともあるでしょう。さらには、故人や先祖とのつながりを感じることもあるかもしれません。好き嫌いや相性といったもので、付き合い方を変えていることもあるかもしれません。我々は、皆、そうした様々な質に彩られた関係の網目のなかで日々を過ごしています。と同時に、各自の認知機能や性格傾向などにおいて、その多くの部分は、これまでの対人関係の所産といえます。発達過程における対人関係の重要性を、強調しすぎることはできません。そして今後、さまざまな場で相互にケアし合える関係を構築していくことは、次世代への重要な責任の一つといえるでしょう。そこで本科目では、①自分の対人世界のありようを意識化する、②対人関係スタイルの成り立ちを吟味する、③互いの成長を支え合う関係構築の方法を模索する、の3つのねらいを設定します。</p>		
授業方法（学習指導法）	自己理解の体験学習を含めながら、関連した代表的な考え方を検討していきます。指定された教材をおもに授業外の時間で学習するほか、いずれか一つのテーマでのグループ・プレゼンテーションと全体の総括レポートを求めます。期末試験は実施しません。		
授業到達目標	<p>(カッコ内は、対応する全学モジュール目標の番号)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の社会的ネットワークを記述することができる。(①、⑫、⑬)</li> <li>・ソーシャルサポートについて説明することができる。(⑦、⑪)</li> <li>・自分の対人関係スタイルを分析することができる。(①、⑫、⑬)</li> <li>・愛着について説明することができる。(⑦、⑪)</li> <li>・ソーシャルスキルについて説明することができる。(⑦、⑪)</li> <li>・自分の課題となっているソーシャルスキルを明示することができる。(①、⑫、⑬)</li> <li>・ケアリングの関係構築の方法を、少なくとも一つ提案することができる。(②、⑥、⑨、⑩)</li> <li>・関心をもった内容について、グループ・プレゼンテーションを適切に行うことができる。(③、⑤、⑫、⑬)</li> <li>・対人世界における自分の行動課題を適切にまとめることができる。(④、⑤、⑩)</li> </ul>		
	第1回授業において、扱う内容や学習方法、評価の仕方等を説明し、参加者との間で必要な調整を行う予定です。その後第4回までは、対人世界を探る基本的観点を学びます。まず人間関係のネットワーク、なかでも必要ときに援助を期待できるソーシャルサポートのネットワークはどうなっているかを各自振り返り、また早期の対人環境がどのように後続の対人関係に影響を与えうるかを検討し		

授業内容	ます。その上で、現在の自分の対人技能（ソーシャルスキル）の傾向と課題を整理します。第4回から第14回までは、テーマに沿ったグループ・プレゼンテーションをもとに学習を深め、適宜復習と討論の授業を含めます。第15回はここまでの学習をまとめてレポートにする準備を行い、最終回はまとめと振り返りを行います。																																		
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回</th> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>導入（学習方法の説明）・社会的ネットワーク</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>ソーシャルサポートとは何か</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>乳幼児期の発達と愛着</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>ソーシャルスキルとは何か</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>グループ発表（友人関係）</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>グループ発表（恋愛関係）</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>復習と討論</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>グループ発表（親子関係）</td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>グループ発表（学校生活）</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>復習と討論</td> </tr> <tr> <td>11</td> <td>グループ発表（リーダーシップ）</td> </tr> <tr> <td>12</td> <td>グループ発表（アサーション）</td> </tr> <tr> <td>13</td> <td>グループ発表（ケアリング）</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td>復習と討論</td> </tr> <tr> <td>15</td> <td>レポートの準備</td> </tr> <tr> <td>16</td> <td>まとめと振り返り</td> </tr> </tbody> </table>	回	内容	1	導入（学習方法の説明）・社会的ネットワーク	2	ソーシャルサポートとは何か	3	乳幼児期の発達と愛着	4	ソーシャルスキルとは何か	5	グループ発表（友人関係）	6	グループ発表（恋愛関係）	7	復習と討論	8	グループ発表（親子関係）	9	グループ発表（学校生活）	10	復習と討論	11	グループ発表（リーダーシップ）	12	グループ発表（アサーション）	13	グループ発表（ケアリング）	14	復習と討論	15	レポートの準備	16	まとめと振り返り
	回	内容																																	
	1	導入（学習方法の説明）・社会的ネットワーク																																	
	2	ソーシャルサポートとは何か																																	
	3	乳幼児期の発達と愛着																																	
	4	ソーシャルスキルとは何か																																	
	5	グループ発表（友人関係）																																	
	6	グループ発表（恋愛関係）																																	
	7	復習と討論																																	
	8	グループ発表（親子関係）																																	
	9	グループ発表（学校生活）																																	
	10	復習と討論																																	
	11	グループ発表（リーダーシップ）																																	
	12	グループ発表（アサーション）																																	
	13	グループ発表（ケアリング）																																	
	14	復習と討論																																	
15	レポートの準備																																		
16	まとめと振り返り																																		
キーワード	対人関係、社会的ネットワーク、ソーシャルサポート、愛着、ソーシャルスキル、ケアリング																																		
教科書・教材・参考書	教科書は指定しません。使用教材は授業第1回に説明します。 参考資料： エピソードでつかむ青年心理学 大野編 ミネルヴァ書房 2010年 人間関係の心理学 高橋恵子 東京大学出版会 2010年 乳幼児のこころ 遠藤他著 有斐閣 2011年 新版 人づきあいの技術 相川充 サイエンス社 2009年 ケアの本質 M.メイヤロフ ゆみる出版 1987年																																		
成績評価の方法・基準等	全回出席、授業外課題とグループ・プレゼンテーション、レポート提出（2000字程度）を前提にします。授業内のワークシート2点×15回+授業外課題3点×15回+グループ・プレゼンテーション15点+レポート10点=100点のうち、60点以上を合格とします。																																		
受講要件（履修条件）	全回出席が可能であること。授業外学習に週平均2時間以上を充てること。自分の言動に責任を持つこと。																																		
本科目の位置づけ	全学モジュール科目「コミュニケーション実践学」の選択科目（モジュールII）である。																																		
学習・教育目標	関心をもったコミュニケーション領域の知識と技能を活用できる。																																		
備考（URL）																																			
備考（準備学習等）																																			



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	前期	曜日・校時	木5
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587032502	科目番号	05870325
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(対人世界の心理学)		
編集担当教員	山地 弘起		
授業担当教員名(科目責任者)	山地 弘起		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	山地 弘起		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養G棟]G-38		
対象学生（クラス等）			
担当教員Eメールアドレス	hyamaji@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	教育学部新館4階		
担当教員TEL	内線2087		
担当教員オフィスアワー	メールで相談のこと		
授業のねらい	<p>皆さんは、例外なく、他の人間たちのなかで生まれ、育ち、今に至っている筈です。周りを見渡せば、親密な関係（家族など）もあれば、生活の一部での関係（クラスメイトなど）やごくわずかな一方的な関係（テレビを通してなど）もあるでしょう。上下関係や年齢に応じた立場や役割に気づくこともあるでしょう。さらには、故人や先祖とのつながりを感じることもあるかもしれません。好き嫌いや相性といったもので、付き合い方を変えていることもあるかもしれません。我々は、皆、そうした様々な質に彩られた関係の網目のなかで日々を過ごしています。と同時に、各自の認知機能や性格傾向などにおいて、その多くの部分は、これまでの対人関係の所産といえます。発達過程における対人関係の重要性を、強調しすぎることはできません。そして今後、さまざまな場で相互にケアし合える関係を構築していくことは、次世代への重要な責任の一つといえるでしょう。そこで本科目では、①自分の対人世界のありようを意識化する、②対人関係スタイルの成り立ちを吟味する、③互いの成長を支え合う関係構築の方法を模索する、の3つのねらいを設定します。</p>		
授業方法（学習指導法）	自己理解の体験学習を含めながら、関連した代表的な考え方を検討していきます。指定された教材をおもに授業外の時間で学習するほか、いずれか一つのテーマでのグループ・プレゼンテーションと全体の総括レポートを求めます。期末試験は実施しません。		
授業到達目標	<p>(カッコ内は、対応する全学モジュール目標の番号)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の社会的ネットワークを記述することができる。(①、⑫、⑬)</li> <li>・ソーシャルサポートについて説明することができる。(⑦、⑪)</li> <li>・自分の対人関係スタイルを分析することができる。(①、⑫、⑬)</li> <li>・愛着について説明することができる。(⑦、⑪)</li> <li>・ソーシャルスキルについて説明することができる。(⑦、⑪)</li> <li>・自分の課題となっているソーシャルスキルを明示することができる。(①、⑫、⑬)</li> <li>・ケアリングの関係構築の方法を、少なくとも一つ提案することができる。(②、⑥、⑨、⑩)</li> <li>・関心をもった内容について、グループ・プレゼンテーションを適切に行うことができる。(③、⑤、⑫、⑬)</li> <li>・対人世界における自分の行動課題を適切にまとめることができる。(④、⑤、⑩)</li> </ul>		
	第1回授業において、扱う内容や学習方法、評価の仕方等を説明し、参加者との間で必要な調整を行う予定です。その後第4回までは、対人世界を探る基本的観点を学びます。まず人間関係のネットワーク、なかでも必要とときに援助を期待できるソーシャルサポートのネットワークはどうなっているかを各自振り返り、また早期の対人環境がどのように後続の対人関係に影響を与えうるかを検討し		

授業内容	ます。その上で、現在の自分の対人技能（ソーシャルスキル）の傾向と課題を整理します。第4回から第14回までは、テーマに沿ったグループ・プレゼンテーションをもとに学習を深め、適宜復習と討論の授業を含めます。第15回はここまでの学習をまとめてレポートにする準備を行い、最終回はまとめと振り返りを行います。																																		
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回</th> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>導入（学習方法の説明）・社会的ネットワーク</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>ソーシャルサポートとは何か</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>乳幼児期の発達と愛着</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>ソーシャルスキルとは何か</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>グループ発表（友人関係）</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>グループ発表（恋愛関係）</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>復習と討論</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>グループ発表（親子関係）</td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>グループ発表（学校生活）</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>復習と討論</td> </tr> <tr> <td>11</td> <td>グループ発表（リーダーシップ）</td> </tr> <tr> <td>12</td> <td>グループ発表（アサーション）</td> </tr> <tr> <td>13</td> <td>グループ発表（ケアリング）</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td>復習と討論</td> </tr> <tr> <td>15</td> <td>レポートの準備</td> </tr> <tr> <td>16</td> <td>まとめと振り返り</td> </tr> </tbody> </table>	回	内容	1	導入（学習方法の説明）・社会的ネットワーク	2	ソーシャルサポートとは何か	3	乳幼児期の発達と愛着	4	ソーシャルスキルとは何か	5	グループ発表（友人関係）	6	グループ発表（恋愛関係）	7	復習と討論	8	グループ発表（親子関係）	9	グループ発表（学校生活）	10	復習と討論	11	グループ発表（リーダーシップ）	12	グループ発表（アサーション）	13	グループ発表（ケアリング）	14	復習と討論	15	レポートの準備	16	まとめと振り返り
	回	内容																																	
	1	導入（学習方法の説明）・社会的ネットワーク																																	
	2	ソーシャルサポートとは何か																																	
	3	乳幼児期の発達と愛着																																	
	4	ソーシャルスキルとは何か																																	
	5	グループ発表（友人関係）																																	
	6	グループ発表（恋愛関係）																																	
	7	復習と討論																																	
	8	グループ発表（親子関係）																																	
	9	グループ発表（学校生活）																																	
	10	復習と討論																																	
	11	グループ発表（リーダーシップ）																																	
	12	グループ発表（アサーション）																																	
	13	グループ発表（ケアリング）																																	
	14	復習と討論																																	
15	レポートの準備																																		
16	まとめと振り返り																																		
キーワード	対人関係、社会的ネットワーク、ソーシャルサポート、愛着、ソーシャルスキル、ケアリング																																		
教科書・教材・参考書	教科書は指定しません。使用教材は授業第1回に説明します。 参考資料： エピソードでつかむ青年心理学 大野編 ミネルヴァ書房 2010年 人間関係の心理学 高橋恵子 東京大学出版会 2010年 乳幼児のこころ 遠藤他著 有斐閣 2011年 新版 人づきあいの技術 相川充 サイエンス社 2009年 ケアの本質 M.メイヤロフ ゆみる出版 1987年																																		
成績評価の方法・基準等	全回出席、授業外課題とグループ・プレゼンテーション、レポート提出（2000字程度）を前提にします。授業内のワークシート2点×15回+授業外課題3点×15回+グループ・プレゼンテーション15点+レポート10点=100点のうち、60点以上を合格とします。																																		
受講要件（履修条件）	全回出席が可能であること。授業外学習に週平均2時間以上を充てること。自分の言動に責任を持つこと。																																		
本科目の位置づけ	全学モジュール科目「コミュニケーション実践学」の選択科目（モジュールII）である。																																		
学習・教育目標	関心をもったコミュニケーション領域の知識と技能を活用できる。																																		
備考（URL）																																			
備考（準備学習等）																																			



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	前期	曜日・校時	木3
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587032901	科目番号	05870329
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(身体・かかわり・言葉)		
編集担当教員	山地 弘起		
授業担当教員名(科目責任者)	山地 弘起		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	山地 弘起		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養D棟]D-37		
対象学生（クラス等）			
担当教員Eメールアドレス	hyamaji@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	教育学部新棟4階		
担当教員TEL	内線2087		
担当教員オフィスアワー	メールで相談のこと		
授業のねらい	<p>知識基盤社会を生きる私たちには、日々飛び交う情報を適切に収集・消化し効果的に発信せよ、というプレッシャーが常にかかっています。そのため、意識的努力によって効率的な判断を行うことが「生きる力」の根幹とみなされる傾向にあります。しかし、「生きる力」とはもっと原初的なものではないでしょうか。私たちそれぞれは生きた身体であるということが忘れられていないでしょうか。少し大げさに言えば、身体とは自分の住みこんでいる世界であり、自分の生き方の現れです。自分自身との関わり方が変わったり、姿勢が変わったりすると、世界も変わって体験されます。複雑な人間関係を生き抜いていくためには、知識基盤ではなく身体基盤の発想が必要なのです。そこで本科目では、自分と身体との関係、および身体と外界との関係について体験的な理解を深め、より自由で手応えのあるコミュニケーションがいかに可能となるかを探ります。普段あまり意識に上らない生きてはたらく身体を、ていねいに捉え返すことで、世界と思考の幅が大きく広がることを願っています。</p>		
授業方法（学習指導法）	<p>身体関係論の代表的な考え方を検討しながら、授業は体験学習を中心に進めます。十分な実習時間を確保するため2コマ連続（木3・4限）の授業を隔週で行います。毎回、授業外課題があるとともに、学習を総括するための確認テストとレポート課題があります。期末試験は実施しません。</p>		
授業到達目標	<p>(カッコ内は、対応する全学モジュール目標の番号)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日常的な心身の体験傾向を理解する。(①、⑨、⑫、⑬)</li> <li>・ 身体の内側に意識を向け、さまざまな感覚や感情の推移を体験する。(①、⑧)</li> <li>・ 自身との関わり方が変わること、体験も変わること気づく。(①)</li> <li>・ 身体次元の体験が言葉となってくるプロセスを体験する。(③、⑤)</li> <li>・ 身体の動きの一部としての声や言葉の表出に気づく。(③、⑤、⑥)</li> <li>・ 身体関係論の代表的な考え方を、体験を踏まえて説明することができる。(⑦)</li> <li>・ 無自覚の社会適応の問題点とそれらへの対処策を、体験を踏まえて議論することができる。(②、⑧、⑨、⑫、⑬)</li> <li>・ 自分の体験傾向と成長課題を適切にまとめることができる。(②、⑤)</li> </ul>		
	<p>第1回において、扱う内容や学習方法、評価の仕方等を説明し、参加者との間で必要な調整を行う予定です。その後、身体関係論の代表的な考え方の解説を含めながら徐々に体験学習を深めていきます。まず、第2回で意識と非意識（無意識）の関係を検討し、第3回～第6回では身体体験に焦点をあてます。第7回にそこまでの振り返りと討論を行います。続いて、第8～10回にフォーカシングとよばれる自己内対話の技法を習得し、その後第11回～第13回では他者との関わりをテーマにした体験学習を、第14回にはそこまでの振り返りと討論を行います。そして、第15回に全体の確認テスト、</p>		

授業内容	第16回で総括を行います。	
	回	内容
	1	I 導入：①身体関係論とは
	2	I 導入：②意識と非意識
	3	II 身体とのかかわり：①私のからだ
	4	II 身体とのかかわり：②重さと動き
	5	II 身体とのかかわり：③呼吸と動き
	6	II 身体とのかかわり：④見えない世界
	7	振り返りと討論
	8	III 自身とのかかわり：①フォーカシング
	9	III 自身とのかかわり：②感覚と感情
	10	III 自身とのかかわり：③身体に尋ねる
	11	IV 他者とのかかわり：①関わるとは
	12	IV 他者とのかかわり：②動きと表現
	13	IV 他者とのかかわり：③声と言葉
	14	振り返りと討論
	15	V まとめ：①確認テスト
16	V まとめ：②総括	
キーワード	身体関係論、身体心理学、身体技法、非言語行動、アウェアネス、フォーカシング、脱学習	
教科書・教材・参考書	<p>教科書は指定しません。参考資料例は以下の通り：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・竹内敏晴「『出会う』ということ」 藤原書店 2009年</li> <li>・森有正「生きることと考えること」 講談社現代新書 1970年</li> <li>・池見陽「心のメッセージを聴く」 講談社現代新書 1995年</li> <li>・久保隆司「ソマティック心理学」 春秋社 2011年</li> <li>・C.V.W. ブルックス（伊東博訳）「センサリー・アウェアネス」 誠信書房 1986年（原著1974年）</li> </ul>	
成績評価の方法・基準等	全回出席を前提にします。（授業ワークシート2点＋授業外課題3点）×15回＋確認テスト10点＋レポート15点＝100点のうち、60点以上を合格とします。	
受講要件（履修条件）	全回出席が可能なこと、授業外学習に週平均2時間程度を充てること、自分に責任を持つことを受講要件とします。	
本科目の位置づけ	全学モジュール科目「コミュニケーション実践学」の選択科目（モジュールII）である。	
学習・教育目標	関心をもったコミュニケーション領域の知識と技能を活用できる。	
備考（URL）		
備考（準備学習等）	いろいろな姿勢や動きをしても気にならない服装で参加して下さい（身体を締め付ける服装や、スカートやサンダル等は避けて下さい）。	



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	前期	曜日・校時	木4
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587032902	科目番号	05870329
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(身体・かかわり・言葉)		
編集担当教員	山地 弘起		
授業担当教員名(科目責任者)	山地 弘起		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	山地 弘起		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養D棟]D-37		
対象学生（クラス等）			
担当教員Eメールアドレス	hyamaji@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	教育学部新棟4階		
担当教員TEL	内線2087		
担当教員オフィスアワー	メールで相談のこと		
授業のねらい	<p>知識基盤社会を生きる私たちには、日々飛び交う情報を適切に収集・消化し効果的に発信せよ、というプレッシャーが常にかかっています。そのため、意識的努力によって効率的な判断を行うことが「生きる力」の根幹とみなされる傾向にあります。しかし、「生きる力」とはもっと原初的なものではないでしょうか。私たちそれぞれは生きた身体であるということが忘れられていないでしょうか。少し大げさに言えば、身体とは自分の住みこんでいる世界であり、自分の生き方の現れです。自分自身との関わり方が変わったり、姿勢が変わったりすると、世界も変わって体験されます。複雑な人間関係を生き抜いていくためには、知識基盤ではなく身体基盤の発想が必要なのです。そこで本科目では、自分と身体との関係、および身体と外界との関係について体験的な理解を深め、より自由で手応えのあるコミュニケーションがいかに可能となるかを探ります。普段あまり意識に上らない生きてはたらく身体を、ていねいに捉え返すことで、世界と思考の幅が大きく広がることを願っています。</p>		
授業方法（学習指導法）	<p>身体関係論の代表的な考え方を検討しながら、授業は体験学習を中心に進めます。十分な実習時間を確保するため2コマ連続（木3・4限）の授業を隔週で行います。毎回、授業外課題があるとともに、学習を総括するための確認テストとレポート課題があります。期末試験は実施しません。</p>		
授業到達目標	<p>(カッコ内は、対応する全学モジュール目標の番号)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日常的な心身の体験傾向を理解する。(①、⑨、⑫、⑬)</li> <li>・ 身体の内側に意識を向け、さまざまな感覚や感情の推移を体験する。(①、⑧)</li> <li>・ 自身との関わり方が変わることで、体験も変わること気づく。(①)</li> <li>・ 身体次元の体験が言葉となってくるプロセスを体験する。(③、⑤)</li> <li>・ 身体の動きの一部としての声や言葉の表出に気づく。(③、⑤、⑥)</li> <li>・ 身体関係論の代表的な考え方を、体験を踏まえて説明することができる。(⑦)</li> <li>・ 無自覚の社会適応の問題点とそれらへの対処策を、体験を踏まえて議論することができる。(②、⑧、⑨、⑫、⑬)</li> <li>・ 自分の体験傾向と成長課題を適切にまとめることができる。(②、⑤)</li> </ul>		
	<p>第1回において、扱う内容や学習方法、評価の仕方等を説明し、参加者との間で必要な調整を行う予定です。その後、身体関係論の代表的な考え方の解説を含めながら徐々に体験学習を深めていきます。まず、第2回で意識と非意識（無意識）の関係を検討し、第3回～第6回では身体体験に焦点をあてます。第7回にそこまでの振り返りと討論を行います。続いて、第8～10回にフォーカシングとよばれる自己内対話の技法を習得し、その後第11回～第13回では他者との関わりをテーマにした体験学習を、第14回にはそこまでの振り返りと討論を行います。そして、第15回に全体の確認テスト、</p>		

授業内容	第16回で総括を行います。	
	回	内容
	1	I 導入：①身体関係論とは
	2	I 導入：②意識と非意識
	3	II 身体とのかかわり：①私のからだ
	4	II 身体とのかかわり：②重さと動き
	5	II 身体とのかかわり：③呼吸と動き
	6	II 身体とのかかわり：④見えない世界
	7	振り返りと討論
	8	III 自身とのかかわり：①フォーカシング
	9	III 自身とのかかわり：②感覚と感情
	10	III 自身とのかかわり：③身体に尋ねる
	11	IV 他者とのかかわり：①関わるとは
	12	IV 他者とのかかわり：②動きと表現
	13	IV 他者とのかかわり：③声と言葉
	14	振り返りと討論
	15	V まとめ：①確認テスト
16	V まとめ：②総括	
キーワード	身体関係論、身体心理学、身体技法、非言語行動、アウェアネス、フォーカシング、脱学習	
教科書・教材・参考書	<p>教科書は指定しません。参考資料例は以下の通り：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・竹内敏晴「『出会う』ということ」 藤原書店 2009年</li> <li>・森有正「生きることと考えること」 講談社現代新書 1970年</li> <li>・池見陽「心のメッセージを聴く」 講談社現代新書 1995年</li> <li>・久保隆司「ソマティック心理学」 春秋社 2011年</li> <li>・C.V.W. ブルックス（伊東博訳）「センサリー・アウェアネス」 誠信書房 1986年（原著1974年）</li> </ul>	
成績評価の方法・基準等	全回出席を前提にします。（授業ワークシート2点＋授業外課題3点）×15回＋確認テスト10点＋レポート15点＝100点のうち、60点以上を合格とします。	
受講要件（履修条件）	全回出席が可能なこと、授業外学習（予復習課題）に週平均2時間程度を充てること、自分に責任を持てることを受講要件とします。	
本科目の位置づけ	全学モジュール科目「コミュニケーション実践学」の選択科目（モジュールII）である。	
学習・教育目標	関心をもったコミュニケーション領域の知識と技能を活用できる。	
備考（URL）		
備考（準備学習等）	いろいろな姿勢や動きをしても気にならない服装で参加して下さい（身体を締め付ける服装や、スカートやサンダル等は避けて下さい）。	



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	前期	曜日・校時	金 4
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587033301	科目番号	05870333
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(芸術・スポーツとコミュニケーション)		
編集担当教員	西田 治		
授業担当教員名(科目責任者)	西田 治		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	西田 治,小原 達朗		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養G棟]G-38		
対象学生（クラス等）			
担当教員Eメールアドレス	osamu-n@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	教育学部本館 5 1 6		
担当教員TEL			
担当教員オフィスアワー	昼休み（事前にメールにてアポイントを取ること）		
授業のねらい	<p>芸術やスポーツ（身体活動）は、そのパフォーマンスをパフォーマー自身が演じる中で自己完結するものである。しかし、他者とのかわりにおいて見聞きする対象になり、相互の感性や意志のやり取りが生まれコミュニケーションが成り立つ。</p> <p>本授業では、音を媒介としたコミュニケーションや身体を媒介としたコミュニケーションの実際について実現象や実践を通して体験的に学ぶことをねらいとしている。</p>		
授業方法（学習指導法）	<p>本授業は、芸術とコミュニケーション（前半）とスポーツとコミュニケーション（後半）に分けて実施する。</p> <p>芸術とコミュニケーションにおいては、音によるコミュニケーションの可能性について理解し、その一端を経験することを目的とする。音楽療法の講義では、言語でのやり取りではなく、音あるいは音楽でコミュニケーションするという点について知的な理解を得ることを目的とし、ジャンベなどのハンドドラムと小物打楽器による即興演奏であるドラムサークルの講義では、実際に音でコミュニケーションをとる体験をし、それをディスカッションによって深めていく活動を行う。</p> <p>スポーツとコミュニケーションにおいては、人のからだの持つ表現性、しぐさの持つメッセージ、意図的なサインによる会話、スポーツ場面での様々な情報伝達などについて実践しながらコミュニケーション能力を身につける。</p>		
授業到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自己の精神性や身体性の中にある特性を理解し、自己の表現的パフォーマンスに生かすことができる。</li> <li>・ 言語的表現を非言語的な表現にイメージし、具体的に行動化できる。</li> <li>・ 芸術やスポーツに内在するコミュニケーションの多様な形について理解し、説明できる。</li> <li>・ 音や身体を使って思いや意志を相手に伝えることができ、生活場面へ汎化させることができる。</li> </ul>		
	<p>前半は西田が、後半は小原が担当する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 授業の意図と概要</li> <li>2 音あそび（アイスブレイク）</li> <li>3 ドラムサークル1</li> <li>4 ドラムサークル2</li> </ol>		

授業内容	<p>5 音楽療法（概論）  6 音・音楽の影響力（理論と経験から）  7 ドラムサークル3  8 ドラムサークル4  9 心はどこにある?...ひとのからだの表現性  10 真似る細胞（ミラーニューロン）...ひとの脳の表現性  11 しぐさに込められた謎  12 サインに込められた意図  13 スポーツの中のコミュニケーション（その1）  14 スポーツの中のコミュニケーション（その2）  15 サインプレーの実践  16 総括</p>
キーワード	コミュニケーション 音楽 身体 スポーツ
教科書・教材・参考書	<p>参考文献</p> <p>『音楽療法士のしごと』  生野 里花 (著)  単行本: 255ページ  出版社: 春秋社 (1998/01)</p> <p>『ファシリテーターの「在り方」 エンパワメントドラムサークル』  佐々木 薫 (著)  大型本: 68ページ  出版社: エー・ティ・エヌ; 菊倍版 (2008/11/11)</p> <p>『音楽文化のすすめ—いま、ここにある音楽を理解するために』  小西 潤子 (編集), 志村 哲 (編集), 仲 万美子 (編集)  単行本: 264ページ  出版社: ナカニシヤ出版 (2007/03)</p>
成績評価の方法・基準等	<p>レポートなどの提出物 70パーセント  出席・講義への参加度 30パーセント</p>
受講要件（履修条件）	
本科目の位置づけ	
学習・教育目標	
備考（URL）	
備考（準備学習等）	



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	前期	曜日・校時	金 5
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587033302	科目番号	05870333
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(芸術・スポーツとコミュニケーション)		
編集担当教員	西田 治		
授業担当教員名(科目責任者)	西田 治		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	西田 治,小原 達朗		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養G棟]G-38		
対象学生（クラス等）			
担当教員Eメールアドレス	osamu-n@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	教育学部本館 5 1 6		
担当教員TEL			
担当教員オフィスアワー	昼休み（事前にメールにてアポイントを取ること）		
授業のねらい	<p>芸術やスポーツ（身体活動）は、そのパフォーマンスをパフォーマー自身が演じる中で自己完結するものである。しかし、他者とのかわりにおいて見聞きする対象になり、相互の感性や意志のやり取りが生まれコミュニケーションが成り立つ。</p> <p>本授業では、音を媒介としたコミュニケーションや身体を媒介としたコミュニケーションの実際について実現象や実践を通して体験的に学ぶことをねらいとしている。</p>		
授業方法（学習指導法）	<p>本授業は、芸術とコミュニケーション（前半）とスポーツとコミュニケーション（後半）に分けて実施する。</p> <p>芸術とコミュニケーションにおいては、音によるコミュニケーションの可能性について理解し、その一端を経験することを目的とする。音楽療法の講義では、言語でのやり取りではなく、音あるいは音楽でコミュニケーションするという点について知的な理解を得ることを目的とし、ジャンベなどのハンドドラムと小物打楽器による即興演奏であるドラムサークルの講義では、実際に音でコミュニケーションをとる体験をし、それをディスカッションによって深めていく活動を行う。</p> <p>スポーツとコミュニケーションにおいては、人のからだの持つ表現性、しぐさの持つメッセージ、意図的なサインによる会話、スポーツ場面での様々な情報伝達などについて実践しながらコミュニケーション能力を身につける。</p>		
授業到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自己の精神性や身体性の中にある特性を理解し、自己の表現的パフォーマンスに生かすことができる。</li> <li>・ 言語的表現を非言語的な表現にイメージし、具体的に行動化できる。</li> <li>・ 芸術やスポーツに内在するコミュニケーションの多様な形について理解し、説明できる。</li> <li>・ 音や身体を使って思いや意志を相手に伝えることができ、生活場面へ汎化させることができる。</li> </ul>		
	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 授業の意図と概要</li> <li>2 音あそび（アイスブレイク）</li> <li>3 ドラムサークル1</li> <li>4 ドラムサークル2</li> <li>5 音楽療法（概論）</li> </ol>		

授業内容	6 音・音楽の影響力（理論と経験から） 7 ドラムサークル3 8 ドラムサークル4 9 心はどこにある?...ひとのからだの表現性 10 真似る細胞（ミラーニューロン）...ひとの脳の表現性 11 しぐさに込められた謎 12 サインに込められた意図 13 スポーツの中のコミュニケーション（その1） 14 スポーツの中のコミュニケーション（その2） 15 サインプレーの実践 16 総括
キーワード	コミュニケーション 音楽 身体 スポーツ
教科書・教材・参考書	参考文献  『音楽療法士のしごと』 生野 里花 (著) 単行本: 255ページ 出版社: 春秋社 (1998/01)  『ファシリテーターの「在り方」 エンパワーメントドラムサークル』 佐々木 薫 (著) 大型本: 68ページ 出版社: エー・ティ・エヌ; 菊倍版 (2008/11/11)  『音楽文化のすすめ—いま、ここにある音楽を理解するために』 小西 潤子 (編集), 志村 哲 (編集), 仲 万美子 (編集) 単行本: 264ページ 出版社: ナカニシヤ出版 (2007/03)
成績評価の方法・基準等	レポートなどの提出物 70パーセント 出席・講義への参加度 30パーセント
受講要件（履修条件）	
本科目の位置づけ	
学習・教育目標	
備考（URL）	
備考（準備学習等）	



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	後期	曜日・校時	木3
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587033701	科目番号	05870337
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(日本語と表現)		
編集担当教員	鈴木 慶子		
授業担当教員名(科目責任者)	鈴木 慶子		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	鈴木 慶子, 大森 アユミ		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養A棟]A-12		
対象学生(クラス等)			
担当教員Eメールアドレス	keiko-s@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室	教育学部514研究室		
担当教員TEL	095-819-2302		
担当教員オフィスアワー	火VI		
授業のねらい	日本語表現の特徴を多角的に吟味し、言語力を深める。		
授業方法(学習指導法)	問題に基づいたグループ学習とその結果の発表 → 質疑応答 → 学習報告書の提出		
授業到達目標	1) 自分自身の、言語によるコミュニケーション力の程度を客観的に認識することができる。(①⑫) 2) 固有の状況に対して、それぞれの立場の意図を析出することができる。(⑬) 3) 固有の状況に対して、意思疎通のための言語表現を想起することができる。(⑤) 4) 日常生活における言語によるコミュニケーションが果たす役割に関して理解し、吟味したコミュニケーションを行使できる。(③⑤⑫⑬)		
	回	内容	
	1	受講基礎調査 グループ編成	
	2	受講基礎調査をふまえて コミュニケーション力の自己診断	
	3	ケーススタディ1-1 「別れの言葉」(レトリックを学ぶ) モデルケースを解読する	
	4	ケーススタディ1-2 「別れの言葉」(レトリックを学ぶ) グループ発表 → 質疑応答 → 学習報告書(完成させて、次回提出)	
	5	復習	
	6	ケーススタディ2-1 「交渉の言葉」(待遇表現を学ぶ)	

授業内容		モデルケースを解読する	
	7	ケーススタディ2-2 「交渉の言葉」(待遇表現を学ぶ) グループ発表 → 質疑応答 → 学習報告書(完成させて、次回提出)	
		8 復習	
	9	ケーススタディ3-1 「言葉の差別」(性差) モデルケースを解読する	
		10	ケーススタディ3-2 「言葉の差別」(地域差) グループ発表 → 質疑応答 → 学習報告書(完成させて、次回提出)
	11 復習		
	12	ケーススタディ4-1 「親切の言葉」(相手にあわせて) モデルケースを解読する	
		13	ケーススタディ4-2 「親切の言葉」(相手にあわせて) グループ発表 → 質疑応答 → 学習報告書(完成させて、次回提出)
	14 復習		
	15 言語によるコミュニケーションの再定義		
	16 試験		
	キーワード	日常生活、文字言語、音声言語	
	教科書・教材・参考書	『ケータイを持ったサル』 正高信男著 中公新書 『ウェブ人間退化論』 正高信男著 PHP研究所 『コミュニケーション力』 斉藤孝著 岩波新書 『コミュニケーション力を引き出す』 平田オリザ著 PHP新書	
	成績評価の方法・基準等	3回の欠席で失格。12回以上出席の場合に、下記で評価する。60点以上で合格とする。 プレゼンテーション、質疑応答 [10%] 個人レポート [20%] グループレポート(学習報告書) [40%] 試験 [30%]	
	受講要件 (履修条件)	個人で行うこととグループで行うことの両方ができること。	
	本科目の位置づけ	全学モジュール科目「コミュニケーション実践学」の選択科目(モジュールII)である。	
学習・教育目標	コミュニケーション領域の知識と技能を活用できる。		
備考 (URL)			
備考 (準備学習等)			



タイトル「**2013年度シラバス（教養教育科目）**」、開講所属「**教養教育-教養教育全学モジュールII科目-09 コミュニケーション実践学**」  
シラバスの詳細は以下となります。



学期	後期	曜日・校時	木5
開講期間			
必修選択	選択	単位数	2.0
時間割コード	20130587034101	科目番号	05870341
授業科目名	●コミュニケーション実践学II(異文化コミュニケーション)		
編集担当教員	大橋 絵理		
授業担当教員名(科目責任者)	大橋 絵理		
授業担当教員名(オムニバス科目等)	大橋 絵理, 奥田 阿子		
科目分類	全学モジュールII科目		
対象年次	1年, 2年, 3年, 4年	講義形態	講義科目
教室	[教養G棟]G-38		
対象学生（クラス等）			
担当教員Eメールアドレス	eohashi@nagasaki-u.ac.jp, a-okuda@nagasaki-u.ac.jp		
担当教員研究室			
担当教員TEL	095-819-2086（大橋）、095-819-2380（奥田）		
担当教員オフィスアワー	火曜日 15:00~16:00（大橋, 奥田）		
授業のねらい	2010年に日本での国際結婚は4.3%以上となっており、この数字は世界のグローバル化に伴い、さらに増加すると推測されている。したがって、「国際結婚について考える」という学習内容は、学生の将来のみならず、日本社会全体にとっても避けては通れない検討課題であると思われる。この授業では、国際結婚という問題を通して、各国の社会、文化、宗教、政治、法律の相違という他者的な視点を考察し、自己の理解を相対化することをねらいとする。		
授業方法（学習指導法）	この授業では、講義、グループ活動、発表を通して国際結婚についての知識を深めていく。初めの数回は、講義形式の授業を数回取り入れ、この授業における前提の知識を得る。その後は、1グループ5名ほどのチームに分かれ発表に向けた調査を行う。調査では、インターネットや外国人に英語でインタビューなどして情報収集をし、チーム内で議論をしながら発表準備を行う。発表では、調査結果を報告するだけでなく、他のグループを評価しながら、新たな知識を身につけていく。		
授業到達目標	アクティブラーニングを取り入れた授業方法を取り、以下の4点を到達目標とする。 1) 学生自身が、自主的に学習目標を立ち上げる。 2) 適切な学習計画を実行し、仲間と議論、熟考する。 3) 学習成果を相互的に評価する。 4) 以上の3点を通して相互の信頼、尊敬及び扶助、表現の自由、他者の意見の受容を獲得する。		
	この授業は国際結婚について、知識を深めます。 また、アクティブラーニングを導入し、主体的に学ぶ姿勢を育成します。		
	回	内容	
	1	授業の概要の説明 1) 国際結婚をテーマとしたアクティブラーニングを授業で実施することを説明する。 2) 「日本の結婚制度の成立」、「欧米のキリスト教社会の結婚」「中東、アフリカのイスラム教社会の結婚」「アジア各国の結婚（韓国、中国、東南アジア）」の歴史と現状についてバランスよく情報を提供する。	
	2	テーマとゴールを設定 1) 「全体のテーマ」国際社会と結婚について考察する。 2) 「全体のゴール」グローバル化する国際社会への対応法 3) 関心がある者どうしでのチーム作り（1チーム5人）	

授業内容	3	計画 1) 各チームで具体的に何をテーマにすべきかを考え、役割分担、各自の仕事を確認する。 2) 具体的な「工程表」「企画書」を作成する。
	4	映画鑑賞 1) 「ダーリンは外国人」の映画を見る。 2) 感想を議論する。
	5	インタビュー 1) 外国人に授業に来てもらって、英語でその国の結婚制度について説明してもらう。 2) その後学生達も英語で質問して、答えてもらう。
	6	情報リサーチ (1) 1) インターネット、書籍、新聞、映画等から各自で集めた情報、あるいは外国人にインタビューした結果をチームで共有する。 2) 情報の取捨選択・分析をする。
	7	情報リサーチ (2) 1) インターネット、書籍、新聞、映画等から各自で集めた情報、あるいは外国人にインタビューした結果をチームで共有する。 2) 情報の取捨選択・分析をする。
	8	情報リサーチ (3) 1) インターネット、書籍、新聞、映画等から各自で集めた情報、あるいは外国人にインタビューした結果をチームで共有する。 2) 情報の取捨選択・分析をする。
	9	製作(1) 1) パワーポイントでプレゼンテーションの製作物を作る
	10	製作(2) 1) パワーポイントでプレゼンテーションの製作物を作る
	11	プレゼンテーション(1) 1) 各回で4チームずつ、プレゼンテーションをして質疑応答をする。 2) それらを学生相互で採点する。
	12	プレゼンテーション(2) 1) 各回で4チームずつ、プレゼンテーションをして質疑応答する。 2) それらを学生相互で採点する。
	13	プレゼンテーション(3) 1) 各回で4チームずつ、プレゼンテーションをして質疑応答する。 2) それらを学生相互で採点する。
	14	ディベート(1) 最高得点だったチームの議題について、賛成派、反対派、ジャッジグループを作って討論する。
	15	ディベート(2) 最高得点だったチームの議題について、賛成派、反対派、ジャッジグループを作って討論する。
	16	レポート レポートをく。
	キーワード	異文化、他者、国際理解、共生思想
	教科書・教材・参考書	特定の教科書は採用しない。  <参考書> 1)小栗 左多里、『ダーリンは外国人』、メディア ファクトリー 2) 河原 俊昭ほか、『国際結婚 多言語化する家族とアイデンティティ』、明石書店 3) 田代純子、『国際結婚・離婚ハンドブック』、明石書店 4) 竹下修子、『国際結婚の諸相』、学文社 5) 榎本 行雄ほか、『国際結婚実務ガイド』、明石書店
成績評価の方法・基準等	授業態度（積極的発言等） 20% プレゼンテーション 40% レポート 40%	
	各人が 1) プレゼンテーションの資料を作る 2) プレゼンテーションをする	

受講要件（履修条件）	3)ディベートに参加する 4)レポートを書く こと
本科目の位置づけ	「異文化コミュニケーション モジュールII」の中での位置づけとして、共生思想を学ぶ。
学習・教育目標	、国際結婚という問題を通して、各国の社会、文化、宗教、政治、法律の相違という他者的な視点を考察し、自己の理解を相対化することをねらいとする
備考（URL）	
備考（準備学習等）	参考資料をきちんと読むこと。

